

令和 6 年 7 月 2 日現在

機関番号：82619

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2020～2023

課題番号：19KK0305

研究課題名（和文）地中海世界の大転換期（前12世紀～前10世紀）と「フェニキア人」の出現

研究課題名（英文）Mediterranean in Transition and the Emergence of "Phoenicians"

研究代表者

小野塚 拓造（Onozuka, Takuzo）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・主任研究員

研究者番号：90736167

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,700,000円

渡航期間：13ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、急激に進展しつつある「フェニキア人」の出現に関連する研究動向を精査し、東地中海における国際交易の前13世紀に端を発する長期的な変容、レヴァント各地における前11世紀頃の都市文化の再興と新たなネットワーク形成を解明することが重要であることを指摘した。この課題の一端を解明するために、日本の調査団によって発掘調査が実施されたゼロル遺跡、レヘシュ遺跡の前13世紀～前8世紀までの居住層と出土遺物を整理し、検討した。フェニキア南部の人びとの影響力が近隣地域に拡大していく過程、フェニキア南部からヨルダン渓谷にかけて形成された偏りのある交易ネットワークについての具体的な知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「フェニキア人」の歴史については、その代名詞ともなっている海洋交易や地中海各地への進出が注目されてきた。こうした「フェニキア人」の活動は、前11世紀頃のレヴァント各地における都市の再興と内陸部につながるネットワーク形成とも関りがあったと考えられ、その一端を考古資料から具体的に考察できたことに学術的な意義があった。また本研究を契機にゼロル遺跡やレヘシュ遺跡の資料整理および居住史の復元が進展したことも重要な学術的成果である。鉄器時代の東地中海世界は現在まで引き継がれる文化要素が生み出された場所の1つであり、本研究の内容は、私たちの文明や社会の基層と成り立ちを考えるための材料となりえる。

研究成果の概要（英文）：This study reviewed monographs and studies related to the emergence of "Phoenicians" that have been intensively published in recent years, and pointed out the importance of examining the long-term transformation of interregional trade in the Eastern Mediterranean that began in the 13th century BCE, and the revival of urban settlements and formation of new networks in various parts of the Levant around the 11th century BCE. The archaeological data from Tel Zeror and Tel Rekhesh, newly processed as part of this study, provide some insights into the influence of the people of the southern Phoenicia on neighboring regions and the uneven trade network that formed between the southern Phoenicia and the Jordan Valley.

研究分野：考古学

キーワード：後期青銅器時代 鉄器時代 レヴァント カナン 都市国家 土器 交易

1. 研究開始当初の背景

フェニキア人が地中海世界の古代史において極めて重要な役割を果たしたことは論を待たないが、その初期の歴史（前12世紀～前10世紀頃）については、長らく「研究上の空白」となっていた。2010年頃から初期フェニキアの中心的な港町であったドルの調査成果が精力的に出版され始めたことで、この時期のフェニキア地域の物質文化の特徴が明らかになり始め、停滞していた研究が活発化した。本研究の出発点となった基課題「フェニキア人の「出現」 考古資料から見た初期の交易活動と対外進出」はこの機会を捉えて実施したもので、フェニキアの人びととエジプトとの交易活動、フェニキアの人びとによる隣接地域への進出について考古資料から検討し、後に「フェニキア人」と呼ばれるようになる人びとの出現過程の一端として解釈することができた。他方、この研究課題に取り組む中で生じたのが、フェニキア人の「出現」は青銅器時代に端を発する地中海世界の大転換期に生じた事象の一つであり、より広い脈絡の中に位置づけて理解すべきであるという問題意識であった。そこで「フェニキア人の出現」を時間的・空間的により広い視点から検討すべく、本国際共同研究を準備するに至った。

2. 研究の目的

本国際共同研究は以下の点を目的とした。考古資料から復元した初期フェニキアの諸相（=基課題の成果）を地中海世界というより広い枠組みの中で検討し、「フェニキア人」が「出現」した背景と意義を、地中海史の中に位置づける。それによって、人類史の一つの画期ともなった地中海世界の「大転換期」の解明に寄与することである。また、これまでの科研プロジェクト等で培われてきた国外の関連研究者とのネットワークをさらに発展させ、今後、関連分野の国際共同研究プロジェクトに日本の研究者が名を連ねるようになるための土台を築くことを目指した。

3. 研究の方法

(1) 当初の研究計画

エルサレムに所在するオルブライト考古学研究所に滞在し、これまでの研究成果を発展させるために、M.J. アダムス博士と共同研究を実施し、以下の課題に取り組む計画であった。

自身が調査研究に携わっていたゼロール遺跡、レヘシュ遺跡の出土資料を再検討する。

南レヴァント（イスラエル/パレスチナ、ヨルダン東部）における「大転換期」の社会集団、民族集団の動態を研究する。

ヘブライ大学の A. マザール名誉教授の協力のもと、初期フェニキアに関連するカシーレ遺跡の出土物を再検討し、フェニキア人と考えられる集団の移住について考察する。

次にトロント大学・中近東文明学部滞在中、T.P. ハリソン教授が手がける北レヴァント（シリア、トルコの地中海沿岸部）の「大転換期」に関する調査研究成果と上記～の研究成果を比較検討し、より広い脈絡の中に位置づけるための共同研究を実施する予定であった。

(2) 研究方法

新型コロナウイルス感染症の世界的拡大により、渡航予定であった2020年度にはオルブライト考古学研究所およびトロント大学が長期にわたって閉鎖された。その後、在外での共同研究を2022年度に延期したものの、この間にアダムス博士が離任、A. マザール名誉教授によるカシーレ遺跡の再検討プロジェクトも延期、トロント大学が拠点の大型学際研究プロジェクトも終了するといった変化があり、計画の変更を余儀なくされた。2022年度にオルブライト考古学研究所に滞在し、所長に着任した K. シュミット博士と共同研究を実施することとなり、上記～の課題に尽力することとした。また期間中に、T.P. ハリソン教授が発掘調査を実施しているタイナート遺跡を訪問し、北レヴァントの関連遺跡の調査現場を視察するとともに、本研究課題に関して共同で検討する場を設けるなど、当初に構想した研究内容に沿って研究を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究動向の検討

本研究および、本研究の基課題（2017～2019年度）を着想した時点では、初期フェニキアに関する具体的な研究は少なかったが、その後、考古学データに基づく具体的な論考（引用文献）や、物質文化とエスニシティの形成過程に関する研究（引用文献）など、重要な出版が相次いだ。また、フェニキア地域で生産されたと目される交易壺の分布、土器の胎土分析による交易活動の解明は著しい進展を見せている（引用文献 など多数）。本研究では、現在進行中の研究動向を踏まえるとともに、初期フェニキア研究をリードする P. ワイマン - バラク博士（テル・アヴィヴ大学考古学部）、A. E. キルブルー博士（ペンシルバニア州立大学教授）らと意見交換する機会を設け、初期フェニキアに関する研究課題を検討した。「フェニキア人」の出現過程は、前13世紀に端を発する東地中海における国際交易とその担い手の変容、前12世紀以降の東地中海における「文明の崩壊」、前11世紀頃のレヴァント各地における都市の再興、新たな交易ネットワークの形成、といった時間的・地理的に広い脈絡の中で、様々な要素に絡まり合いながら徐々に進行したと考えるべきであり、その一端を考古資料から検証することが本研究課題の射程となっている。そこで注目したのが、フェニキア地域と内陸にある都市との関係である。出版されているデータを集めたところ、フェニキア地域の交易壺、またはその模倣品

が南レヴァントの内陸部の都市遺跡で出土しているが、その分布には偏りがあることが分かってきた。内陸の銅資源の流通路とフェニキア地域とをつなぐ交易路が形成されていった可能性があり（引用文献）、その解明が目下の研究課題となっている。

(2) ゼロール遺跡出土資料の分析

ゼロール遺跡は、現在のイスラエルの中部沿岸地域、フェニキア地域南部の主要遺跡であるドルから 30km ほど南方に位置する集落址である。1960 年代に日本オリエント学会が組織した調査団によって発掘調査が実施された。本研究が扱う前 13 世紀～前 10 世紀頃にかけての居住層が存在しており、フェニキアの人びとと近隣地域との接触や影響を検証することができる貴重な遺跡であるが、現在の学術的水準に見合う調査成果は出版されていない。本研究では研究協力者の大学院生の協力を得て同遺跡の調査記録の整理を実施し、各層位の出土土器を実見することで、初期鉄器時代の物質文化と居住史の概要を明らかにした。初期鉄器時代の前半（前 11 世紀）の居住層からは、同遺跡が後期青銅器時代（前 14 世紀頃）から通商の拠点であったにもかかわらず、フェニキア地域との活発な接触を示す痕跡を見出すことができなかった。他方、前 10 世紀の居住層、および同時期に形成された墓域の出土物には、フェニキア地域との交流を物語る遺物が多数含まれていることが分かった。フェニキア南部の人びとの活動範囲（または接続性）が近隣地域へと及んでいったのは、おそらく前 10 世紀以降となる。

(3) レヘシュ遺跡出土資料の分析

レヘシュ遺跡は 2006 年より日本の調査団によって断続的に発掘調査が実施されており、初期鉄器時代（前 12 世紀～前 11 世紀）を通して都市的な集落として繁栄したことが分かってきた。同遺跡はフェニキア南部とヨルダン渓谷の間に位置し、主要な交易路が通っていたとされるエズレル平野からもほど近い。本研究の一環として、前 13 世紀～前 10 世紀頃の居住層が様々な調査区で検出された第一期発掘調査（2006～2010 年）の層位と出土物の再検討を実施し、各層位の編年や年代の精査を進めた。次に、フェニキア地域とのつながりを示す交易壺などの土器、フェニキア地域の物質文化の影響を示す土器（フェニキア式彩文土器の模倣品など）を抽出し、その出現パターンや隣接地域における分布を検討した。一部の交易壺については、薄片の岩石学的観察による胎土分析を実施、その製作地を推定することで交易品の流通に関する具体的な知見を得ることができた。検討の結果、初期鉄器時代のレヘシュ遺跡は都市国家の中核であったと目されるが、フェニキア地域とのつながりを示す遺物は、近隣のエズレル平野やヨルダン渓谷の都市遺跡と比べて極めて少ないことが分かった。こうした分布パターンは、居住者の文化的嗜好および新たに形成されつつあった交易ネットワークの偏りを反映していたと考えられる。また、レヘシュ遺跡においてフェニキア地域とのつながりを示す遺物が増えるのは、前 8 世紀以降であることが分かった。

(3) 北レヴァントとの比較

本研究の一環として北レヴァント（トルコのアムーク平原）で実施されている前 13 世紀～前 10 世紀頃の居住層をもつ主要遺跡の発掘調査を視察し、現地で研究に携わる研究者と本研究の成果を共有し、地中海の「大転換期」について共同で検討する機会を設けた。タイナート遺跡で調査を実施する T.P.ハリソン教授、アチャナ遺跡の調査を進めるムスタファ・ケマル大学の M.アカル博士らと意見交換し、北レヴァントにおける彩文土器文化の変容、地域の中核となる都市の交替と交易ネットワークとの関係について、レヴァントの南北で見られる共通点について共有することができた。

< 引用文献 >

- Edrey, M. 2019. *The Phoenicians in the Eastern Mediterranean during the Iron Age I-III: Ethnicity and Identity in Light of the Material Culture* (AOAT 462), Ugarit Verlag: Münster.
- Lehmann, G. 2021. The Emergence of Early Phoenicia. In A. Faust, Y. Garfinkel and M. Mumcuoglu (eds.) *State Formation Processes in the 10th Century BCE Levant* (Jerusalem Journal of Archaeology 1), 272-324.
- Mazar, A. 2022. On the Relations between Phoenicia and the Beth Shean Valley in Iron Age. In U. Davidovich, N. Yahalom-Mack and S. Matskevich (eds.) *Material, Method and Meaning, Papers in Eastern Mediterranean Archaeology in Honor of Ilan Sharon* (Ägypten und Altes Testament 110). Zaphon: Münster, 195-212.
- Waiman-Barak, P. 2016. *Circulation of Early Iron Age Goods: Phoenician and Egyptian Ceramics in the Early Iron Age, An Optical Mineralogy Perspective*, Ph D Dissertation, University of Haifa.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野塚拓造	4. 巻 74-1
2. 論文標題 「東地中海における青銅器・鉄器時代移行期」を理解するために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 津本英利、桑原久男、長谷川修一、橋本英将、小野塚拓造	4. 巻 2021年度
2. 論文標題 後期鉄器時代城塞とローマ時代ユダヤ人村落の調査－イスラエル国テル・レヘシュ第二期調査－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集 令和 3年度 考古学が語る古代オリент	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋本英将・小野塚拓造・桑原久男	4. 巻 28
2. 論文標題 イスラエル国、テル・レヘシュの「下の町」 第 12 次調査（2019 年）を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集 令和 2 年度 考古学が語る古代オリент	6. 最初と最後の頁 36-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hashimoto, H, Kuwabara, H., Onozuka, T., Hasegawa, S.	4. 巻 2
2. 論文標題 Excavating at the Lower Shelf of Tel Rekhesh	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 roceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East	6. 最初と最後の頁 281-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 小野塚拓造
2. 発表標題 南レヴァントにおける青銅器・鉄器時代移行期の様相
3. 学会等名 アコリス考古学プロジェクト2022 公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 工藤洋大・阿部善也・小野塚拓造・山花京子
2. 発表標題 古代エジプト新王国時代におけるガラスの白濁技法の変遷の解明
3. 学会等名 日本文化財科学会第39回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 T. Onozuka and O. Naveh
2. 発表標題 Bronze Industry Remains at Tel Zeror Revisited
3. 学会等名 Urbanism and Technological Innovation: A view from Ancient Israel: The 2nd Workshop（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小野塚拓造
2. 発表標題 鉄器時代 IIB 期の北イスラエルの物質文化：外来的要素とその背景
3. 学会等名 日本オリエント学会 第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takuzo Onozuka, Hidemasa Hashimoto, Hisao Kuwabara, and Shuichi Hasegawa
2. 発表標題 Anaharath, Amarna Letters (EA237-239), and Tel Rekhesh
3. 学会等名 2021 Annual Meeting, American Society of Overseas Research (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tel Rekhesh and Its Connectivity through the Iron Age: A Preliminary Perspective
2. 発表標題 Takuzo Onozuka
3. 学会等名 JSPS-ISF Colloquium, Between Tel Rekhesh and Horvat Tevet: New Insights on Connectivity in the Eastern Jezzeel Valley during the Late Bronze and Early Iron Ages (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小野塚拓造
2. 発表標題 バビロニア時代？ テル・レヘシュの鉄器時代末期の年代について
3. 学会等名 第28回イスラエル考古学研究会（科研課題報告会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 津本英利、桑原久男、長谷川修一、橋本英将、小野塚拓造
2. 発表標題 後期鉄器時代城塞とローマ時代ユダヤ人村落の調査 - イスラエル国テル・レヘシュ第二期調査 -
3. 学会等名 日本西アジア考古学会主催 『第29回（2021年度）西アジア発掘調査報告会』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小野塚拓造
2. 発表標題 考古資料から探る鉄器時代の人々といきものとの関り
3. 学会等名 古代オリエント博物館『シンポジウム 西アジアのいきものを巡る歴史と文化』（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
シュミット カタリーナ (Schmidt Katharina)	オルブライト考古学研究所・(部局なし)・所長	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
イスラエル	オルブライト考古学研究所		